

令和三年五月十二日(水)

安岡正篤の一言集

# 安岡正篤一日一言



安岡正泰 監修

心を養い、生を養う

## 1月 1日 年頭自警

- 一、年頭まず自ら意気を新たにすべし
- 二、年頭古き悔恨を棄つべし
- 三、年頭決然滞事を一掃すべし
- 四、年頭新たに「善事を発願すべし
- 五、年頭新たに「佳書を読み始めむべし

## 26日 健康の三原則

第一に心中常に「喜神」を含むこと。  
 (神とは深く根本的に指して言った心のことで、どんなに苦しいことに逢っても心のどこか奥の方に喜びをもつということ。)

第二に心中絶えず感謝の念を含むこと。

「感恩報謝」

第三に常に陰徳を志すこと。

(絶えず人知れず善い事をしていこうと志すこと。)

「陰徳」 「徳不孤 必有鄰」

## 3月 10日 「知」と「行」

陽明学の祖

王守仁 (1472-1528)

「知は行の始めなり。行は知の成るなり」という。王陽明の説明がある。「知」というものは「行」の完成である。「行」というものは「知」の完成である。これが一つの大きな循環関係をなすものである。知から始まるとすれば、行は知の完成、そしてこれは行の始めだから、知というものは循環するわけです。本当に知れば知るほどそれは立派な行ないになってくる。知が深くなれば行ないがまた尊くなる。

知行合一

## 1月 30日 六中観

忙中閑有り  
 忙中に擱んだものこそ本物の閑である。  
 苦中楽有り  
 苦中に擱んだ楽こそ本当の楽である。  
 死中活有り  
 身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれ。  
 壺中天有り  
 どんな境遇でも自分だけの内面世界は作れる。どんな壺中の天を持つか。  
 意中人有り  
 心中に尊敬する人、相ゆるす人物を持つ。  
 腹中書有り  
 身心を養い、経綸に役立つ学問をする。

私は平生苟かに此の観をなして、如何なる場合も決して絶望したり、仕事に負けたり、屈託したり、精神的空虚に陥らないようには心がけている。

## 7月 2日 朝こそすべて

英仏の古諺に曰く「朝こそすべて」と。  
 一日二十四時間、朝があり昼があり夜があるとするのは死んだ機械の一日にすぎない。活きた時間は朝だけ、換言すれば、本当の朝をもたなければ一日無意義だということだ。朝を活かすことから人生は始まる。

"There is only the morning in all things."

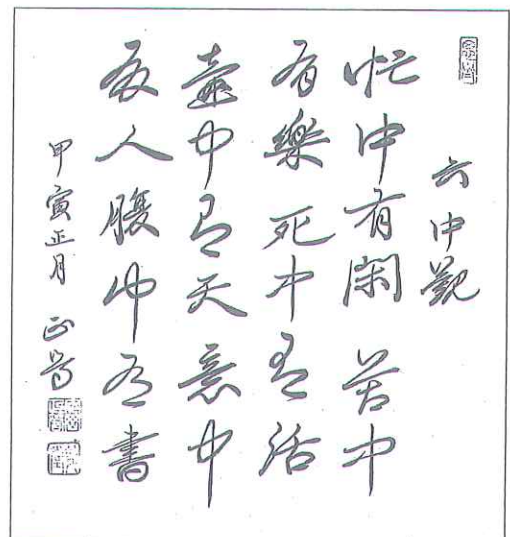
毎日致知 2021 1月号 対談 (pp.66, 75)

## 10月 2日 縁尋機妙 多逢聖因

良い縁がさらに良い縁を尋ねて発展していく様は誠に妙なるものがある。これを縁尋機妙という。  
 また、いい人に交わっていると良い結果に思われる——これを多逢聖因という。  
 人間はできるだけいい機会、いい場所、いい人、いい書物に会うことを考えなければならぬ。

百朝集

光明蔵



甲寅正月 正首

9日 三日書を読まざれば ①

黄山谷に次のような名高い語があります。
「士大夫三日書を読まざれば則ち理義胸中に入らず。便ち覚ゆ、面目・憎むべく語言・味なきを」(多朝集部(一六))
書は聖賢の書。理義は義理も同じで、理は事物の法則、義は行為を決定する道德的法則であります。大丈夫たるものは三日聖賢の書を読まない、本当の人間学的意味における哲理・哲学が身体に血となり肉となつて循環しないから、面相が下品になつて嫌になる、物を言つても言語が卑しくなつたような気がする——というのであります。

10日 三日書を読まざれば ②

本当の学問というものは、血となつて身体中を循環し、人体・人格をつくる。したがつて、それを忘れれば自ら面相・言語も卑しくなつてくる。それが本当の学問であり、東洋哲学の醍醐味もまた、そういうところにあるわけであります。

黄庭堅(号山谷) (1045-1105)
北京の詩人・書家
蘇東坡と並稱せらるる

21日 思考の三原則 ①

私は物事を、特に難しい問題を考えると
きには、いつも三つの原則に依る様に努めてゐる。
第一は、目先に捉われないで、出来るだけ長い目で見る事、
第二は物事の一面に捉われないで、出来るだけ多面的に、出来れば全面的に見ること、
第三に何事によらず枝葉末節に捉われず、根本的に考える。
ということである。

22日 思考の三原則 ②

目先だけで見たり、一面的に考えたり、枝葉末節からだけで見ると、長期的、多面的、根本的に考えるところとは大變な違いがある。物事によつては、その結論が全く正反対ということになることが少なくない。
我々は難しい問題にぶつかると此の心掛を忘れてはならぬ。

11日 知識・見識・胆識

いつも申しますように、識にもいろいろあつて、単なる大脳皮質の作用に過ぎぬ薄っぺらな識は「知識」と言つて、これは本を読むだけでも、学校へのらりくらしり行つておるだけでも、出来る。

しかしこの人生、人間生活とはどういふものであるか、或はどのような風に行くべきであるか、というような思慮・分別・判断というようなのは、単なる知識では出て来ない。そういう識を「見識」という。しかし如何に見識があつても、実行力、断行力がなければ何にもならない。

その見識を具体化させる識のことを「胆識」と申します。けれども見識というものは、本当に学問、先哲・先賢の学問をしないと、出て来ない。更にそれを實際生活の場に於いて練らなければ、胆識になりません。
今、名士と言われる人達は、みな知識人なのだけれども、どうも見識を持った人が少ない。まだ見識を持った人は時折あるが、胆識の士に至つてはまことに寥寥たるものです。これが現代日本の大きな悩みの一つであります。

18日 人物に学ぶ ①

大物学を修める上において、ここに捨てることの出来ない見逃すことの出来ない二つの秘訣がある。
それは極めて明瞭であつて、第一に人物に学ぶこととあります。つまり吾々の、出来るならば同時代、遡つて古代、つまりは古今を通じて、凡そ優れた人物というのを見逃してはならない。出来るだけ優れた人物に親炙し、時と所を異にして親炙することが出来なければ、古人に学ぶのである。

19日 人物に学ぶ ②

人物の研究というもののは抽象的な思想學問だけやつておつては逃げ得られないものです。どうしても具体的に、生きた優れた人物を追求するか、出来るだけそういう偉大なる人物の面目を伝え、魂をこめておる文獻に接することとあります。
その点古典というものは歴史の飾にかかつておりますから特に力があります。
つまり私淑する人物を持ち、愛読書を得なければならぬということが人物学を修める根本的、絶対的条件であります。

14日 六然

自處超然(自ら処すること超然)
自分自身に關してはいつこう物に囚われないようにする。
處人藹然(人に処すること藹然)
人に接して相手を楽しませ心地良くさせる。
有事斬然(有事には斬然)
事があるときははぐずぐずしないで活発にやる。
無事澄然(無事には澄然)
事なきときは水のように澄んだ氣でおる。

得意澹然(得意には澹然)
得意なときは淡々とあつさりしておる。
失意泰然(失意には泰然)
失意のときは泰然自若としておる。
私はこの「六然」を知つて以来、少しでもそうした境地に心身を置きたいものと考えて、それとなく忘れぬように心がけてきたが、実に良い言葉で、まことに平明、しかも我々の日常生活に即して活きている。

31日 萬燈行 燈照陽

内外の状況を深思しましょう。
このままで往けば、日本は自滅するほかはありません。
我々はこれをどうすることも出来ないのでしょうか。
我々が何もしなければ、誰がどうしてくれましょうか。
我々が何とかするほか無いのです。
我々は日本を易えることが出来ます。
暗黒を嘆くより、一燈を付けましょう。

萬燈照一國

我々はまず我々の周囲の暗を照す一燈になりましょう。
手のとどく限り、至る所に燈明を供えましょう。
一人一燈なれば、萬人萬燈です。
日本はたちまち明るくなります。
これ我々の萬燈行であります。
互に真剣にこの世直し行を励もうではありませんか。

# 特別講話 「終戦の詔書」について

兵庫縣姫路護國神社崇敬奉賛会

常任理事 三木英一

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措力サル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ

志ニアラス然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百億有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ繼續セムカ終ニ我カ

民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク拳國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

## 御名御璽

昭和二十年八月十四日

各国務大臣副署

八月十五日に開かれた「英靈顕彰の集い」において「終戦の詔書」について特別講話をさせて頂きました。詔書の作成過程を説明した後、詔書の内容について解説しました。

### 一、作成過程について

昭和二十年八月九日 鈴木貫太郎首相ら六巨頭による最高戦争指導者会議（和平か抗戦かは結論が出ず）。十日 御前会議で天皇陛下のご聖断。ポツダム宣言を条件付き（国体護持）で受け入れることを決定。迫水久常書記官長が川田瑞穂氏（早稲田大学教授、内閣嘱記）に終戦詔書の起草を依頼。十三日 川田氏が迫水氏らの意見をもとに草案に赤字を入れ、迫水氏が清書した案を、安岡正篤氏（金鶏学院・日本農士学校主宰、大東亜省顧問）に見せ、安岡氏が修正を加える。十四日 第二回御前会議で再び天皇陛下のご聖断により修正を加える。午後十一時近く、詔書渙発（国務大臣副署完了）。午後十一時五十分頃、玉音収録完了。十五日 玉音盤奪取クーデター失敗。正午から天皇陛下による玉音放送。

### 二、詔書の内容と安岡正篤氏の修正意見について

安岡氏は、特に草案の「朕ハ實ニ堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ臥薪嘗膽為ス有ルノ日ヲ將來二期シ爾臣民ノ協翼ヲ得テ永ク社稷ヲ保衛セムト欲ス」の部分に、「朕ハ義命ノ存スル所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ萬世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」と修正を求めた。「義命」とは、『春秋左氏伝』成公八年の「信以行義、義以成命」から取られており、良心の至上命令であって、それによつて終結するというのが、天皇道の本義と考えたが、内閣がその本義を理解できずに、「時運の趨ク所」と変えてしまったのは不見識だと残念がられたと聞いている。「萬世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」は、宋の学者、張横渠の言葉で、朱子編『近思錄』為学類に出ている。「為天地立心、為生民立道、為去聖繼絶学、為萬世開太平。」から取られている。

詔書を読みながら解釈、説明し、最後に昭和天皇のご聖断とそのお気持ちを拝察して、胸の詰まる思いで、通して音読させて頂きました。そして、玉音放送のCDを参加者全員で拝聴して終了致しました。参加者からは、このように「終戦の詔書」を全文読んだのも、玉音放送を全文聴いたのも初めてであったと感謝され、務めが果たせて嬉しく思いました。

安岡正篤先生 略年譜

西曆	和曆	年齢	略歴	時代の動き
1898	明治31	1	大阪市順慶町にて誕生（父堀田喜一、母悦子の四男）三男陸三中河内の芝尋常小学校に入学	日清戦争（1894-95）
1904	明治37	7	『大学』の素読を始める	日露戦争（1904-05）
1906	明治39	9	浅見綱斎（春日神社）から漢籍の手ほどきを受け始める	
1908	明治41	11	中河内日下小学校五年に進級	
1910	明治43	13	四條畷中学校入学 剣道部顧問	
1911	明治44	14	絹川清三郎先生に傾倒	
			学問と剣道に熱中 生駒の大儒岡村閑翁に学ぶ（陽明学へ）	
1915	大正4	18	・ 剣道 絹川清三郎	
			・ 漢詩 浅見綱斎	
			・ 漢籍 岡村閑翁	
			・ 坐禅 島長代	
1916	大正5	19	全関西中学剣道大会で優勝	
			安岡家との養子縁組まとまる	
1919	大正8	22	四條畷中学校、上京。旧制第一高等学校入学（九月）	シベリア出兵（1918）
1921	大正10	24	東京帝国大学法学部入学	
			『支那思想及び人物講話』を著作	
			酒井忠正・後藤文雄・八代六郎	
			牧野伸顕・吉田茂の知遇を得る	
1922	大正11	25	九段富士見楼で安岡婦美と挙式	
			東京帝国大学卒業、文部省入省	
			半年で辞職、東洋思想研究所を設立、『王陽明の研究』を発売	
			陽明学研究会発足	
			社会思想研究所	
1923	大正12	26	満洲訪問、王永江と知遇を得る	関東大震災（1923・9）
1924	大正13	27	海軍大学校で講義（幹事は山本五十六中佐）	
1925	大正14	28	満鉄の夏期大学に臨講	金融恐慌おこる（1927）
1927	昭和2	30	『日本精神の研究』を発売	
			元姫路藩主酒井忠正侯の支援により、金鷄学院開院される（各地知事よりの推薦者二十数名入学）	
1929	昭和4	32	『東洋倫理概論』刊行	世界恐慌（1929）
1930	昭和5	33	日本農士学校開設（嵐山町菅谷）	1933
1932	昭和7	35	国維會結成（会長 近衛文麿） 篤農協会発足	上海事変（1932）

1949	1948	1946	1945	1944	1943	1942	1941	1940	1939	1938	1933
昭和24	昭和23	昭和21	昭和20	昭和19	昭和18	昭和17	昭和16	昭和15	昭和14	昭和13	昭和8
52	51	49	48	47	46	45	44	43	42	41	36

瓢箪山の自宅で父堀田喜一逝去  
『為政三部書』を發刊  
世界旅行(12月〜翌年7月)  
神戸港から照國丸にて、上海・香港・ペナン・コロンボ(双葉山より受電)・カイロ・ナポリ・ローマ・ジュネーヴ・パリ・ロンドン・ベルリン・パリ・ボストン・シカゴ・ロスアンゼルス・横浜港に帰着  
『経世瑣言』を發刊

日本農士学校創立10周年

『日本精神通義』を講ず

東洋農道振興大会(日本、朝鮮満州、蒙古、支那の五族)

「西洋文明の没落と農村文化」

大東亜戦争宣戦布告(真珠湾攻撃)

『易学入門』を講ず 「カ士七則」

作成 大阪金鷄書院で講義

中支・台湾・海南島歴訪

東条内閣批判

朝鮮總督府の招きで渡鮮

小磯内閣大東亜省顧問に就任

上海訪問、支那各地を巡る

東京大空襲 自宅罹災、金鷄学院にて起居、家族は菅谷に疎開

終戦の詔勅の編纂に関与

終戦(玉音放送)

GHQにより公職追放とされる

伊與田覚氏来所し、太平思想研究所創立の相談

金鷄学院解散を命ぜられる

伊與田覚氏、太平思想研究所設立、日本農士学校第十五期卒業式及び解散式 続校を検討

東北農家研修所開校(菅原兵治所長となる)

白山御殿町に新居完成

師友会成立

機関誌『師友』發刊される

日本農学校、日本農士学校から改称して創立(日本農士学校十八年間576名が卒業)

師友会結成を決意 機関誌

『師友』創刊、以来、三十五年間

四百七号を数える

国際連盟脱退(1933)  
2・26事件(1936)  
日独伊防共協定(1936)

酒井忠正氏、農林大臣就任  
中野正剛自殺

皇紀二六〇〇年

日独伊三国軍事同盟  
汪兆銘南京政府樹立  
日ソ中立条約締結

広島、長崎に原爆投下

中華人民共和国建国  
極東軍事裁判にて二十五被告に有罪判決下る

極東軍事裁判終わる  
湯川博士ノーベル物理学賞

1950	昭和25	53
1951	昭和26	54
1952	昭和27	55
1953	昭和28	56
1954	昭和29	57
1955	昭和30	58
1956	昭和31	59
1957	昭和32	60
1958	昭和33	61
1959	昭和34	62
1960	昭和35	63
1961	昭和36	64
1962	昭和37	65
1963	昭和38	66

夏期講座始まる(護国寺月光殿) 林繁之氏上京し、事務局に入る 公職追放解除される 吉田茂総理兼外相と会談 常盤屋にて「先生を囲む会」開催される(政財界関係者中心) 埼玉県立興農研究所を設立 『日本の父母に』 発刊 大阪にて「先哲講座」開講、以来三十年百数十回に及ぶ 師友会定例講座開講される (毎月一日、「照心講座」(二十八年間の、三百回)、毎月十五日、「時務講座」で時局を講ず 伊與田覚氏、京都八幡に有源学院を創立、吉村岳城逝去(七月) 台湾訪問 国政同志会の最高顧問に推挙 全国巡講本格化 小林日出夫氏、明德出版社を創設し、師友会出版事業を始める 父安岡盛治逝去(谷中本光寺) 村上素道老師照心講座に上京 緒方竹虎氏逝去(一月)、三木武吉氏逝去(七月)先生落胆甚だし 関西師友協会設立、大阪中之島公会堂で発会式(3月23日)令和3年3月31日解散(64年間) 新日本協議会結成、代表理事に素心会(国会議員の勉強会)の最高顧問に推挙される 全国師道研修会(宇治靖国寺) ラジオ放送「暁の鐘」始まる 毎月『暁鐘』、『朝の論語』として刊行 時津風親方より双葉山道場訓の揮毫を依頼される「木鶏」 節句会(後に不忘れ)設営される 伊勢萬燈行大会(9月25日)挙行以来、二十二年間 兵庫県師友協会結成「萬世太平の曲」発表、姫路尚志会結成 姫路書写山円教寺に参詣 ラジオ放送「暁の鐘」終講

警察予備隊創設 朝鮮戦争 起る サンフランシスコ講和条約に 調印(吉田茂)(九月) 日米安全保障条約調印 NHKテレビ放送開始 スターリン没す 朝鮮休戦協定 自衛隊発足 ビキニ水爆実験 原子力基本法 第一回アジア・アフリカ会議 東欧の暴動、スエズ動乱 国際連合に加盟 ソ連人工衛星打上げ アメリカ人工衛星打上げ 伊勢湾台風襲来(9月26日) キューバ革命 日米新安全保障条約調印 農業基本法成立 ケネディー大統領暗殺 東京五輪開催(1964) 中国、文化大革命

1966	昭和41	69	佐藤総理の渡米に際し、会談 兄堀田眞快高野山の管長に成る 大阪財界人勉強会「無以会」誕生 吉田茂氏逝去、国葬に参加 政教懇話会結成される 経済界有志の会「不如会」結成 生駒山中に成人教学研修所落成 三島由紀夫割腹自殺に悲歎す 訪台し、蒋介石総統と会談 孔家直系孔徳成氏を会談 篤農協会理事酒井忠正氏逝去 恩賜文庫郷学研修所落成 田中総理訪中し、周恩来会談 高熱で臥床するも大事に至らず 宇野哲人氏、百寿にして逝去 喜寿祝賀会開催される 婦美夫人逝去 佐藤総理急逝(築地新喜楽)	1966	昭和41	69	佐藤総理 渡米 いざなぎ景気(57力月)
1967	昭和42	70	大阪万国博覧会(1970)	1967	昭和42	70	公害基本法成立
1969	昭和44	72		1969	昭和44	72	
1970	昭和45	73		1970	昭和45	73	
1971	昭和46	74		1971	昭和46	74	
1972	昭和47	75	日中国交正常化 沖縄日本復帰 石油ショック 佐藤栄作、ノーベル平和賞 ベトナム戦争終結(20年間) 台湾蒋介石総統没す	1972	昭和47	75	
1973	昭和48	76		1973	昭和48	76	
1974	昭和49	77		1974	昭和49	77	
1975	昭和50	78		1975	昭和50	78	
1976	昭和51	79	ロッキード事件、周恩来、毛 沢東死去	1976	昭和51	79	
1977	昭和52			1977	昭和52		
1978	昭和53			1978	昭和53		
1979	昭和54			1979	昭和54		
1980	昭和55	83	神武景気(31力月) 日中平和条約	1980	昭和55	83	
1981	昭和56	84		1981	昭和56	84	
1982	昭和57	85		1982	昭和57	85	
1983	昭和58	86	全国師友協会解散(1984)	1983	昭和58	86	

菅原兵治氏逝去  
大平正芳氏急逝  
姫路師友会中国古典講座開設  
赤坂御苑園遊会に出席  
第四回各地師友交流会 姫路  
書写山田教寺にて開催  
全国師友協会会長職を辞職  
静養の為に、高野山に登嶺  
大阪住友病院に入院  
伊與田覚氏、見舞いに参上し、  
「道縁無窮」の言葉を聴く  
伊與田覚氏、山の水に林檎と  
書写山田教寺のお守りを持参  
12月13日午後6時逝去